



ショートコメント

★★★

Data 2025-28

監督・脚本：チャン・ゴンジ

エ

原作：チャン・ガンミョン「韓国が嫌いで」（吉良佳奈江訳／ころから）

出演：コ・アソン／チュ・ジョンヒョク／キム・ウギョム／イ・サンヒ

ケナは韓国が嫌いで (Because I Hate Korea)

2024 年／韓国映画

配給：アニモプロデュース／107 分

2025（令和 7）年 3 月 15 日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

出版不況下の韓国でも、『82 年生まれ、キム・ジョン』は「今日の若い作家」シリーズの 1 冊として大ヒットし、映画化も大成功したから、本作はそれに続いて“柳の下”の 2 匹目のどじょうを狙ったもの！？

そのテーマはタイトルからも明白だが、ケナはなぜ韓国が嫌いなの？また、生まれた国が嫌いなら、そこから逃げ出せばそれでいいの？それはあまりに安易すぎるのでは？子供の頃から競争社会と格差社会を当然と思ってきた、昭和生まれで団塊世代の私はどうしてもそう思ってしまうが、若い世代の感覚は？また、ケナへの支持率は？

ニュージーランドに移り、語学学校に通いながらいくらバイトをしても、成功など夢のまた夢！私はそう思っているが、案の定・・・！異国での成功のコツは“人脈の形成”だが、ケナの男性観は如何に？7 年も交際した年上の彼氏と別れた決意は評価できるが、新たに次々と男関係を形成していく姿（？）は如何なもの？ケナは一体いつ勉強しているの？ましてや、友人（男）の葬式のため一時帰国するとは一体ナニ？

大谷翔平の大成功は例外的なもので、もともと素晴らしい素質を持った人間の努力の賜物だということをケナはしっかり学ぶ必要があるのでは？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

◆『82 年生まれ、キム・ジョン』（19 年）（『シネマ 47』226 頁）は、韓国の「今日の若い作家シリーズ」の 1 つとして、ベストセラー小説になった同名小説の映画化だが、本作はそれに続いてベストセラー小説を映画化したものだ。いわば、2 匹目の“柳の下のどじょう”を狙ったものだが、その出来は？

監督は、2015 年に原作小説を読んですぐに映画化をしようと決めた「第 2 のホン・サンズ」や「韓国の是枝裕和」と称されている若手のチャン・ゴンジェ。主演はボン・ジュノ 監督の大ヒット作『グエムルー漢江の怪物ー』（06 年）（『シネマ 11』220 頁）でソン・ガ

ンホ演じる主人公の娘役を演じて、第 27 回青龍映画賞新人女優賞を受賞したコ・アソンだから注目されるのは当然だ。

『ケナは韓国が嫌いで』というタイトルをただで、本作は今ドキの韓国の若者の“生態”を赤裸々に描いた物語だと分かるから、私の興味はイマイチ。しかし、そんな話題作だと知れば一応見ておかなくちや・・・。

◆本作の主人公ケナ（コ・アソン）は、ソウル郊外で両親と妹のミナ（キム・ジミン）と共に暮らす 28 歳の女性。大学卒業後、金融会社に就職し、毎日片道 2 時間かけてバスと地下鉄を乗りつぎ、勤務先のあるソウル市内の江南まで通っているそうだ。他方、大学 1 年生の頃から 7 年間付き合っている恋人のジミョン（キム・ウギョム）は、ケナから数年遅れた大学卒業を控え、記者を志望しているらしい。

2 人が食事をしている導入部のシーケンスでは、「外国に行きたい」と口にするケナに対し、韓国の魅力や外国で暮らすことのデメリットを説明し、「自分が就職したら支える」と答える風景が登場するが、これを見ていると、2 人のピントがうまく合っていないことがよくわかる。他方、ケナの話を聞いていると、熾烈な競争社会と、自分ではどうにもならない格差の中で、ケナが生まれ育った韓国から抜け出すことを願っている理由をはっきり読み取ることができるが、それは、今の韓国で 20 代の今を生きているすべての女性にとってどうしようもないことだ。また、ケナが韓国が嫌いな理由の 1 つが、「韓国は寒いこと」だが、それもうしようもないことだ。しかるに、ケナがそこから得た結論は、「ここでは幸せになれない」、「韓国から逃げ出す」ことだが、その方法は？また、逃げ出した後の新たな自分の生きる道の設計は？

私は中学・高校時代に、否応なく強制される受験勉強による自由が制約された生活に痛烈な圧迫感を感じ、自由と解放を欲したが、残念ながらその途を見つけることができなかった。28 歳のセナにとってのそれは、会社を辞め、恋人とも別れ、ひとりでニュージーランドに旅立つことだったが、そんな（単純な）ことで、自由と解放が得られるの？昭和の団塊世代の 1 人として生まれ、猛烈な競争社会は当然のこととして受け止めながら 76 年間を生きてきた私には、ケナの「韓国が嫌いな理由」に納得できない上、「だからそんな嫌いな韓国を逃げ出す」という結論（人生設計）も納得できないものだ。

◆何よりも私が驚いたのは、セナのニュージーランド行きが正式の留学ではないことだ。英語の勉強もろくにしないまま、ひとりでニュージーランドのオークランドにやってきたケナは、現地で留学仲介業を営むテウン一家のガレージに仮住まいすることにしたが、その前途は不安だ。テウンは「初心に立ち戻って学ぶこと」をケナに伝え、きちんと勉強して大学院で学位を取って就職すれば永住権を取れること、そして、もしどうしてもダメな時はニュージーランド人と結婚すればいいと笑って話したが、さて・・・？

ケナは語学学校に通いながら、飲食店や不動産会社など複数のアルバイトを掛け持ちする中で、少しずつニュージーランドでの生活に馴染んでいったが、そんな毎日が続いているだけでニュージーランドでの成功が得られるの？私には、大いに疑問だ。

◆人間が“生き方”を選ぶについて、特に青春時代は、どんな友人と知り合うかが大きなポイントになる。女性にとっては、とりわけどんな男性と知り合い、交際を始めるかが大きなポイントになる。ケナが7年間付き合っていたジミョンと、ニュージーランドに旅立つ前に別れたのは大きな決断。そんな決断の上で、ひとりでニュージーランドにやってきたのだから、勉強とバイトに集中し、男どころではないはず！私はそう思っていたが、セナの前には、①長年の恋人ジミョンの他に、②アルバイト先で出会った、ケナの2歳年下にもかかわらず、ため口をきき、チャラけた雰囲気のエリー（チュ・ジョンヒョク）、③インドネシア人の男性、が登場し、ケナと“それなりの男女関係”を築いていくのでそれに注目！

もっとも、映画ではケナが交際する男性はこれに凝縮されているが、原作では、5人もボーイフレンドが登場するらしい。ちなみに、本作のパンフレットには、Original Work「小説と映画の6つの違い」があり、その「5 ケナが愛したすべての男性へ」の項目では、

ケナにとって、恋愛は大切なもの、小説に登場する5人のボーイフレンドは、映画では付き合って7年のジミョン、ニュージーランドのアルバイト先で出会った年下のヒョンソ、パーティで知り合ったインドネシア人の恋人に凝縮されている。ケナが彼らと今の幸せや愛について語り合い、ぶつかり合いながら、自分の価値観や見解を確立していく様子が見所のひとつとなっている。

と書かれているから、ビックリ。

私の見解では、現実にはそんな甘いものではないはずだが・・・。

◆本作中盤には、ケナの唯一の女性の友人としてエリーが登場する。エリーは、ブランドショップで働き始めたケナが店の女性から服装やスタイルが店の雰囲気に合わないと注意を受けた際に“助け舟”を出してくれた女性。そして、エリーは「自分を守るには黙ってちゃダメ。これが世界基準」とケナを諭してくれた貴重な女性だ。

しかし、その後の、あるホームパーティーで、エリーがビルの屋上からパラグライダーで飛ぶ姿を動画に撮るようケナに依頼し、「危険を顧みずに生きるってこういうことよ」と言いながら屋上から飛び降りることで、ある事件に発展していくエピソードはイマイチ。エリーのこんな生き方が、一体何のために原作に書かれ、本作のスクリーン上に描かれているの？

◆また、本作には、韓国で“幸福の伝道師”として有名だった女性が、末期がんのため死

去するエピソードや、“幸福の伝道師”の本を持ち歩いていた大学の友人キョンユン（パク・スンヒョン）の訃報が届くエピソードが登場するが、それは一体なぜ？私には、それもよくわからない。ケナがキョンユンの葬儀のため久しぶりに韓国に帰国するのは一体なぜ？ケナには、ニュージーランドでやらなければならないことが山ほどあるのでは・・・？

さらに一時帰国したケナが、別れたはずの元恋人のジミョンと再会したうえ、一夜を共に過ごすのは一体なぜ？私にはそれがサッパリわからない。ケナはニュージーランドで生活する数年間で、一体何を学び、今、何をしようとしているのだろうか？

◆本作のラストの舞台は、韓国の空港になる。そこで待ち時間を過ごすケナは、ソファアーに座り、ニュージーランドでシェフになったジェインからの30歳の誕生日祝いのビデオ通話を受けていたが、それは一体なぜ？二人の（男女）関係は今どこまで進んでいるの？そして、翌週30歳になるケナは、今これからどこへ旅立とうとしているの？

韓国でジミョンと再会したケナはジミョンの部屋で一夜を過ごしていたが、今はジミョンと再度別れ、新たにジェインと付き合う決心をしたの？まさか、そんなことはないと思うのだが、私にはそんなこんなのケナの気持ちがさっぱりわからないから、イライラ。『82年生まれ、キム・ジヨン』に見た主人公ジョンの気持ちも、本作のケナの気持ちも私にはさっぱりわからない。要するに、所詮女心は不可解ということ・・・？

2025（令和7）年3月17日記